九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

‘Vain, Idle, Visionary Thoughts’ : A Modest Proposalにおけるスウィフトの風刺

山内, 暁彦
九州大学大学院文学研究科 : 博士課程

https://doi.org/10.15017/6786959

出版情報：九大英文学. 33, pp.17-35, 1990-12-01. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

'Vain, Idle, Visionary Thoughts'

—*A Modest Proposal* におけるスウィフトの風刺—

山 内 暁 彦

序

スウィフトの数多くの風刺作品の中に、ひときわ目立つ特異な作品がある。アイルランドの乞食や貧民の子供を食用に供すべしという提案を述べた *A Modest Proposal*『控えめな提案』(1729) は、小品ながら我々の関心を引き付ける、色々な要素を持っている。この作品では、スウィフトの技法上の常套手段として用いられたペルソナの陰に、風刺家本人の存在が強く感じられるばかりでなく、アイルランド人を含めた人類に対する、彼の希望と絶望とが作品のなかで鬩ぎあっていることまでが読者に感得される。1720年以降、関わりあいを持ってきたアイルランド問題への発言の後に、スウィフトが最終的に到達したこの作品が、如何なる逆説と技法の上に成り立っているか、また、彼が持つに至った感情はどのようなものであったか、彼の風刺の全般的な傾向や、その他のアイルランド関連の作品に留意しつつ、考えてみたい。

I

Gulliver's Travels (1726) の後書きとしての意味を持つ、「ガリヴァ船長からシンプソンへの手紙」の結びは、スウィフトの風刺の特質を考える上で重要な手がかりになる。

> I should never have attempted so absurd a Project as that of reforming the *Yahoo* Race in this Kingdom; but, I have now

done with all such visionary Schemes for ever.

April 2, 1727.[1]

ガリヴァは帰国後、自らのヤフー的な性情が無くなっていないことを嘆き、英国のヤフー即ち人類の教化を試みる等ということはもう止めたと述べることにより、ガリヴァ自身の旅行記執筆の行為そのものを否定的に捉える姿勢を表明しているように見える。ここには、*Gulliver's Travels* の実際の作者であるスウィフトの内面の苦しみが垣間見える。結局は風刺というものは無益なものなのではないかという疑念をガリヴァの口を借りてスウィフトは洩らしているのかも知れない。しかしながら、この手紙の結びの句は、一旦は人類教化の行為に着手し、比類ない『旅行記』を完成させた後、読者のみならず自分自身をも突き放したように身を引く態度こそがスウィフトの本領であるということを示す事例でもあるのだ。事実、この手紙は1727年の日付を持っているものの、1735年の第5版に初めて表れたものであり、スウィフトによる執筆もこれとほぼ同時期であると考えられている。[2] 1735年といえば、彼の死のちょうど10年前、既に晩年を迎えたスウィフトはかつての活発な文筆活動を終えようとする時期にあたる。*'visionary'* という言葉はスウィフト晩年の真情の言葉ではなかっただろうか。

この *'visionary'* という語は、これより約6年前の執筆になる、*A Modest Proposal* の中にも見出すことが出来る。

> But, as to my self; having been wearied out for many Years with offering vain, idle, visionary Thoughts; and at length utterly despairing of Success, I fortunately fell upon this Proposal.[3]

スウィフト、あるいは彼のペルソナである提案者が、「無意味な、下らない、夢のような」考えを述べるのに飽き飽きした挙げ句に、最後に思いついたという提案とは如何なる物であったか。その内容は、正式な題、*A Modest Proposal for Preventing the Children of poor People in* Ireland, *from being a Burden to their Parents or Country; and for making them benefical to*

the Publick からは全く想像もつかぬ体の物である。この小品こそ、スウィフトのアイルランド関連の著作中の傑作であるのみならず、古今の風刺文学中他に類のない怪作であるのだ。乞食をはじめとする貧民の子供は一歳に達したら食用として貴人や地主や金持ちに売るべし、という提案が、理路整然、淡々と、あたかも経済学の論文であるかのように述べられている。更にこの提案がもたらすであろうはずの利点を多数列挙したうえに、提案者は自信満々に「この提案には何の異議も唱えようがないはずである（116)」と断言する。

幼児の人肉食の勧めという提案内容が、あまりに常軌を逸したもののように思われるので、読者はまずこの一点に注意を余儀なくされる。周知のように、夏目漱石もこの作品に言及し、「これを真面目とすれば純然たる狂人である」との評言を残している。もちろんこれを狂人の戯言だと片付けてしまえるほど事態は単純でないことをよく承知している漱石は、スウィフトの性格に関して「彼の真面目というのは風刺と冷罵以外に存在しないのである、皮肉な所が彼の真面目な所である」とし、更に「冗談を休み休み言う人の冗談は自ら冗談と真面目の境がつくが、平常冗談を商売にしている者の冗談は普通の談話と区別することが出来ない」と述べ、正常か狂気かの判断そのものは行わず、むしろその区分の意味のなさをほのめかしている。[4] あるいはアンドレ・ブルトンの編んだ『黒いユーモア選集』の巻頭にこの作品の一部が収められていることによって象徴的に示されるように、作品の内容が、人類の持つ根源的な禁忌にまさに触れようとすることから生じる嫌悪感や不安感は拭い去りがたい。

しかしながら、一般的な読者の感情面にばかりとらわれていては、この作品の持つ他の多くの重要な側面、特に技法面を含めた、風刺としての特異性や、作者スウィフトの風刺家としての人間観等を見落とすことになるだろう。上に引用した部分はこの提案の主たる部分を言い終えた後の付け足しに見えるが、これは決して蛇足ではない。'visionary Thoughts'を繰り返した挙げ句「ほとほと疲れ果ててしまった」という言葉は提案者のあからさまなアイロニーであると同時に、作者スウィフト自身の偽らざる気持ちの表明であるからだ。彼がこれ以前の言論において真面目に提案してきた様々な事項を直前の段落で列挙することを敢えて行ったという点に、また、その上で、それら

の提案に対して自ら否定的に判断を下しているという、ガリヴァの手紙に通じる点にこそ我々は注目せねばならない。スウィフトの風刺における常套手段である、ペルソナ使用の効果という点から考えると、このような言明は、本来明瞭でなければならないはずの、本人とペルソナとの区分を完全に曖昧にしてしまうため、作品の語り手が備えるべき一貫性という面では、遺漏が生じてしまうことになる。それでも敢えて次のようなかなりの量の一節を挿入し、これらこそが本来の理想的な策であるべきなのだということを、あからさまに示さざるをえなかったということこそ、絶望と希望との間を揺れ動く風刺家の姿をよく表していると言えないだろうか。そして、これらは「無意味な、下らない、夢のような」思案であるから、「このような便法のことなど誰も言わないでもらいたい」とスウィフトが強調すればするほど、この作品は、次に引用する段落を除いて、ほとんど全てが逆説から成り立っていることを読者に示す結果になるのである。

> Therefore, let no man talk to me of other Expedients: *Of taxing our Absentees at five Shillings a Pound: Of using neither Cloaths, nor Houshold Furniture except what is of our own Growth and Manufacture: Of utterly rejecting the Materials and Instruments that promote foreign Luxury: Of curing the Expensiveness of Pride, Vanity, Idleness, and Gaming in our Women: Of introducing a Vein of Parsimony, Prudence and Temperance: Of learning to love our Country, wherein we differ even from* LAPLANDERS, *and the Inhabitants of* TOPINAMBOO*: Of quitting our Animosities, and Factions; nor act any longer like the* Jews, *who were murdering one another at the very Moment their City was taken: Of being a little cautious not to sell our Country and Consciences for nothing: Of teaching Landlords to have, at least, one Degree of Mercy towards their Tenants.* Lastly, *Of putting a Spirit of Honesty, Industry, and Skill into our Shop-keepers; who, if a Resolution could now be taken to*

> *buy only our native Goods, would immediately unite to cheat and exact upon us in the Price, the Measure, and the Goodness; nor could ever yet be brought to make one fair Proposal of just Dealing, though often and earnestly invited to it.*
>
> THEREFORE I repeat, let no Man talk to me of these and the like Expedients . . . . (116-17)

列挙された、以上の10余りの項目は、スウィフトが、*A Modest Proposal* 以前に各種の提案や説教の形で繰り返し述べてきた論点と共通するものなのである。例えば、最初の項目の、イングランドで暮らしているアイルランドの不在地主については、'a catalogue of complaints and indictment'[5]という形容のまことに相応しい、彼の説教の一つ、*Causes of the Wretched Condition of Ireland*「アイルランドの窮状の諸原因」で、その問題を取り上げている。また、国産品の使用の奨励については、*A Proposal for the Universal Use of Irish Manufacture*『アイルランド製品の会面的な使用に関する提案』において、1720年という早い時期から、これを主張し、さらに1727年になると *A Short View of the State of Ireland*『アイルランド情勢小見』の中で、これを国家繁栄のために不可欠な条件の一つに数えている。[6] この他の諸点も程度の差はあるがいずれも同様である。以上の諸点を検討してみると、スウィフトの論点は、地主や商人に関する経済的な問題と、愛国心や党派心、あるいは高慢や虚栄といった道徳的な問題とに大別することが出来る。前者に関しては、スウィフトの主張は、彼の *Drapier's Letters* においても顕著であるように、非常に具体的で、論点が良く限定されている。一方後者に関しては、彼は、ある程度普遍的で抽象的な概念を唱えている。いずれにせよ、ここで注意すべき点は、スウィフトの念頭にあるのは専らアイルランド一国の固有の問題であるということである。人間の行為のなかで風刺の対象にならないものはないとするならば、すぐれた風刺の題材が、人類一般の普遍的な愚かさや悪徳である場合が少なくないのと同様に、特殊な状況下にある人々の抱える個別的で特殊な問題もまた風刺の格好の素材となり得る。このことを如実に示したのがスウィフトのアイルランド関係の著作であるということ

が出来る。事実彼は、「この地上のどの国とも異なったこの国特有の状況」をはっきりと認識していた。そしてこの現実認識のうえに彼の作品は成り立っているのである。

> I cannot reflect on the singular condition of this Country, different from all others upon the face of the Earth, without some Emotion, and without often examining as I pass the streets whether those animals which come in my way with two legs and human faces, clad and erect . . . .[7]

II

それでは彼のアイルランド観、アイルランド人観が如何なるものであったか概観してみたい。Irvin Ehrenpreis は、"Dr. S * * * t and the Hibernian Patriot"で、読者が一般的に抱いているようなスウィフトの心情に関する見解、即ちアイルランドに対する軽蔑や嫌悪という否定的な感情を持っていたに違いないとの見解とは、一見相容れない、アイルランドにおける彼の個人的な安楽な生活を匂わせる手紙に注目をするように我々を促して彼の論を結んでいる。[8] スウィフトのポープ宛ての1728年5月10日付けの手紙がそれである。

> Except absence from friends, I confess freely that I have no discontent at living here; besides what arises from a silly spirit of Liberty, which as it neither sowers my drink, nor hurts my meat, nor spoils my stomach farther than in imagination, so I resolved to throw it off.[9]

1728年という時点は、スウィフトが *Gulliver's Travels* を出版したのと、*A Modest Proposal* を発表する時とのちょうど中間である。幾ら親密な友人に宛てたものであるとは言っても、このような穏やかな調子の手紙を書いている

こと自体に我々は驚かざるをえない。

しかし、よく考えてみれば、文面に表れた軽い皮肉を別としても、彼の安らぎは単に日常の生活面における、個人的なレベルのものであるに過ぎないことは明らかである。やはり、風刺家としてのスウィフトの安らぎは、彼の牧師館の外にまで及ぶものであったとは言えないだろう。ひとたびダブリンの町や広く国中に目を転ずると、そこには襤褸を纏った貧民や乞食の群れや荒廃した国土がその姿を晒していたのである。そうした様子は実は *Gulliver's Travels* のなかで既に描かれていたものである。それは、ガリヴァの乗る馬車に押し寄せてくる、その醜悪さを拡大された、巨人国の乞食の群れであり、ラガード近郊の無茶苦茶に耕された土地や廃屋同然の家などである。[10] このような光景をまのあたりにしたガリヴァは、例のごとく単純素朴な書きぶりで彼の見聞を語っていくだけである。それに対して、作者スウィフトは、醜悪さや愚行からどうしても逃れることの出来ない人類の弱さや至らなさを痛感していたことだろう。稀に見る理想的な国家として描かれたブロブディンナグにさえ乞食が存在するというところに、スウィフトの、人類に対する絶望の深刻さが窺われるのである。

但し、人間に対する深い絶望のみが彼に筆を取らせたと見る見方は一面的に過ぎるだろう。時と場合によってはスウィフトの風刺の根底に、愚かで救いがたい同胞に対する憐れみや愛情のほの見えることも皆無ではない。また、例えば *Gulliver's Travels* の第一篇のように、ある場合にはユーモアの要素も彼の風刺の特質の中で主要な位置を占めることもある。しかし、全般的な傾向としては、スウィフトの風刺は、他人を温かい目で見るような優しい同情心を以て愚行や欠点を揶揄するというよりはむしろ、あくまでも対象の持つ欠陥や悪徳を、怒りを以て白日の下に晒し、それを痛罵して止まないところに本分がある。ホラチウス流の諧謔より、ユウェナリス流の厳格さがスウィフトの本質に近いとするならば、*A Modest Proposal* のようにほとんどユーモアの要素を欠く作品こそ、彼本来の風刺態度の結実と見做して良いことになるだろう。私見によれば、わずかに諧謔の気味の在るのはただ一カ所に過ぎない。それは、「さるフランス人の有名な医師であり、偉大な著述家」の伝えるところによれば、魚は出産を促す食糧であるから、ローマ・カトリック

の国では四旬節から九カ月の後に子供が多く生まれる、というくだりである。(112) 全体の文脈から切り離してこれだけを考えると、まことしやかにラブレーの名を挙げている脚註と相俟ってのおかしみがここにはある。魚肉の生理学的な効果や、出産の統計が現実にはどうであったかと想像させられるという点を別として、論理の進め方自体の飛躍や意外性等によって、この箇所は実に愉快なものとなっている。また、これはスウィフトが *A Tale of a Tub* (1704)以来、折りに触れて取り上げてきた、カトリックに対する揶揄嘲笑の一例と見做すことも出来る。しかしながら、ここでの笑いは一瞬のものでしかない。提案者が"Therefore reckoning a Year after *Lent,* the Markets will be more glutted than usual." (112)と述べて、彼の提案の具体的な内容に読者を引き戻すとき、ユーモラスな雰囲気は完全に相殺されてしまうのである。

人類に対する絶望と並んで、人間に対する軽蔑心も、スウィフトにおいては無視できない要素になっている。仮に、ある個人や集団が尊敬に値するものであれば、その人物や社会の、行為や制度などは風刺の直接の対象になることは少ない。Holloway の言うように、悪を嘲笑によって攻撃するのが風刺であるとするならば、善なるものは、風刺から最も遠いところにあるものである。[11] 嘲笑と軽蔑とは不可分の関係にあることは言うまでもないだろう。この作品を考える場合、重要なのは、アイルランドを"the land I hate" [12]と呼んだスウィフトが個人的に抱いていた、アイルランドに対するかなり否定的な感情である。

Remove me from this land of slaves,
Where all are fools, and all are knaves;
Where every knave & fool is bought,
Yet kindly sells himself for nought; [13]

"Ireland"という題の詩の、この一節だけを取ってみても、Ferguson の言うように、彼の軽蔑心はきわめて現実的なものであったと考えられる。[14] アイルランド人はスウィフトにとって、尊敬すべき人々でなかったばかりでなく、自分と同等の地位にあったということすら出来ないのである。

ところで、*A Modest Proposal* を含めたアイルランド関連の作品を考える場合、Herbert Davis のように、怒りと同情心とが二つながらスウィフトの風刺における重要な契機となっていると考える一般的な傾向がある。"[H]e is moved with compassion and torn with anger at the bitter thought that the situation is such that there is now no conceivable remedy."[15] 但し、彼の怒りがほとんど全ての人間に向けられているのにたいして、彼の同情心は彼らに平等に向けられているとは言いがたいというところに、この二点を同列に扱うことの限界がある。博愛主義とは程遠い、軽蔑心という毒を含んだ辛辣さが彼の思想の根底にあって、我々の注意を引き付けるのである。作品に即して具体的に言えば、貧者や乞食がどのように扱われているかにこのことの例証を求めることが出来るであろう。彼らが陥った窮状は、自業自得によるものである故、救済するに値せず、と突き放す姿勢は、*A Modest Proposal* と深い関りを持つ説教「アイルランドの窮状の諸原因」の基調を成している。

> . . . there is hardly one in twenty of those miserable Objects who do not owe their present Poverty to their own Faults; to their present Sloth and Negligence; to their indiscreet Marriage without the least Prospect of supporting a Family, to their foolish Expensiveness, to their Drunkenness, and other Vices, by which they have squandered their Gettings, and contracted Diseases in their old Age.[16]

このように、彼らの過ちを厳しく指弾したうえで更にスウィフトは、真面目な人々がこういう者どもを援助するのは理にかなったことであろうか、とまで述べているのである。とは言うもののスウィフトは貧者たちを完全に見放してしまえと言う結論に至るのではなく、援けねばならない相手がどこの誰であるかをよく考慮するという条件付きで、彼らを「可能なかぎり援助すべきである」と述べる。[17] 救うに値する者を、そうでない者から、はっきりと選別しようというのである。このように、差別を是認し、奨励するかのような態度は、この説教の随所に見られる。例えば、慈善学校や養育院に収容

するのは、浮浪者の子供ではなく、避けがたい災難のために零落した正直者の子供に限るべきである、とか、他の地方からの浮浪者は追放し、教区内の乞食にだけ施しを与えるようにすべきである、といった提案が真剣になされているのである。

差別という点からすると、*A Modest Proposal* において、食用に供すべしとされた子供は、Donald T. Torchiana が指摘しているように、主としてカトリックの子供であって、スウィフトの属する国教会の子供その他ではない。

> Absentees, resident landlords, shopkeepers, and strong farmers will eat the children. Nevertheless, the children will also be predominantly the native Catholic Irish themselves.[18]

アイルランドにおいて、少数のプロテスタント（国教会）が、人口の大多数を占めていたローマ・カトリック教徒を支配する社会構造は、名誉革命以降18世紀全体を通じて定着していく。祖父の代にアイルランドへやってきた、アングロ・アイリッシュであるスウィフトはあくまでも自らを状況の局外において意見を述べているかのようである。このことは、彼の風刺全体に見られる、対象や読者と彼との間の距離感に通じる重要な点である。

> . . . because the Number of *Popish Infants,* is, at least, three to one in this Kingdom; and therefore it will have one other Collateral Advantage, by lessening the Number of *Papists* among us. (112)

この記述は単なる冗談ではない。この言葉からは様々な深刻な意味が読み取れるのである。

人口の実に4分の3を占める人々の子供を食べることを勧め、その結果として「人口が大いに減る」ことを容認する、というよりは進んでそれをもくろむ提案は、まさに本末転倒である。この意味においては、作品そのものの特質である逆説の具体的な例の一つをカトリック教徒の扱いに見出すことが

出来る。スウィフトのペルソナとしての提案者は、このカトリック教徒の減少を、様々な利点の第一に挙げていることからも分かるように、この件を本気で真面目に論じているようにみえる。したがって真の作者の意図は、このような意見を述べるような人物、すなわちスウィフトのペルソナこそ非難に値するのであるということを読者に訴えることである、という解釈が、一般的には成立しそうに思われることだろう。だが、宗教や出自の差を越えての博愛心を、スウィフトに期待できるのだろうかという疑問が残る。ことは宗教に関わるだけに微妙な問題であるが、上の一節が反語であって、真意は逆であるのか、逆説に見せ掛けて、スウィフトは実は真意を語っているのか、我々は判断に苦しむ。スウィフトの風刺を理解しようとするときの最も大きな難点の一つは、まさにこの点ではないだろうか。すなわち、彼のペルソナと彼の素顔との区別を常に念頭に置かなければ、作品の意味を把握することは出来ないという観念を、作品自体が読者に半ば強いて抱かせるという特質がそれである。このことは、風刺が一般に反語や逆説を通して行われることや、スウィフトの作品が、多くの場合、一人称の記述で成り立っていることなどを考慮すると、避けられない特質なのである。

III

そこで、もし仮に我々が、スウィフトの真意や意図をひとまず脇において、彼のペルソナがどのような人物として我々の前に提示されているかという点に関心を集中すると、例えば、John M. Bullitt の *Jonathan Swift and the Anatomy of Satire* における議論のように、作者スウィフトとペルソナとを別個に扱い、後者の役割や特徴に、より注意を払うという態度になるということは一応納得のいくものである。

> What gives to this short essay its unique horror is not the proposal itself, which might well have been crudely disgusting, but the character of the "author." For the fictitious author, Swift's mask, is a perfect example of a character "acting in

ignorance of his condition."[19]

スウィフトのペルソナは、'humanitarian sentiment'と'actual brutarity'との間の矛盾に気が付かない、自分で自分の状態を理解していない者である。彼は、幼児を食用に供する等という提案をするばかりか、老人や病人が刻々と死んでいくのに何の心痛も覚えていない。また、*"just dropt from its Dam"*という語句に端的に示されているように、人間を非人間化して扱うような、'self-delusion'に囚われた人物である。そして、このような人物の性格こそ、この作品の恐ろしさをもたらすのであると、Bullitt は主張している。

確かに、*A Modest proposal* の「提案者」は、スウィフトのペルソナの中でも特に注目に値する人物である。Pope はスウィフトに関して、*The Dunciad* で、

O thou! whatever Title please thine ear,
Dean, Drapier, Bickerstaff, or Gulliver! (Bk. I, 19-20)

と書いたが、彼はこの四者と肩を並べるものであろう。それでは彼はスウィフトによって如何なる人物に仕立てられているだろうか。

その特徴の第一は、"exaggerated calm"[20]とも表現され得る、議論の進め方の計算された冷静さである。これは、提案の前段から明瞭な点である。彼はまず、ダブリンの街に乞食の子供が溢れている状況から説き起こし、問題点を提示してみせる。それを解決する手段として今から提案しようという計画のもたらす利点をいくつか挙げておく。読者の関心を喚起している訳である。ここでは更に彼は、"they shall, on the contrary, contribute to the Feeding, and partly to the Cloathing, of many Thousands." (110) という伏線を張ってもいる。こうした、感情よりは理性に訴えるような理路整然とした論述の様式は、一部を除いて、提案のほとんど全編を貫き保たれることになるのである。

第一点とも関連する、ペルソナの第二の特徴は、彼の議論の事実中心の事務的な正確さである。特にアイルランド人の総人口から、貧民の子供の数の

毎年の増加を推計するくだりや、子供を一人売る度ごとにあがる利益の計算など、彼はあたかも統計学者であるかのように見える。

第三点は、人間を完全に動物扱いしていることである。提案の特異性の要因の一つは、本来人間の子供を意味する言葉'child'が、あたかも家畜動物の仔であるかのように扱われているという点にある。彼は、本来家畜について用いられるような言葉を頻繁に使用している。例えば彼は、"a Child, *just dropt from its Dam,* " "Ten Shillings for the *Carcase of a good fat Child*"と述べたり、あるいは、もっとあからさまに子供を家畜と同等に扱って、"I rather recommend buying the Children alive, and dressing them hot from the Knife, as we do *roasting Pigs.*"と、料理法にまで言及している。(110, 112, 113) 更に、子供だけでなくその母親についても同様の扱いである。

> Men would become as *fond* of their Wives, during the Time of their Pregnancy, as they are now of their *Mares* in Foal, their *Cows* in Calf, or *Sows* when they are ready to farrow; nor offer to beat or kick them, (as it is too *frequent* a Practice) for fear of a Miscarriage. (115)

最後に指摘すべき点は、あからさまなアイロニーの使用である。このことがとりわけ顕著である"I GRANT this Food will be somewhat dear, and therefore very *proper for Landlords;* who, as they have already devoured most of the Parents, seem to have the best Title to the Children." (112)という一節に関しては、Everett Zimmermanもこれを取り上げている。"In *A Modest Proposal,* for example, the narrator appears to make directly ironic remarks."[21] この箇所は、攻撃、糾弾の対象が、地主たちであることが明白に意識されるような書かれ方になっているのである。既に大部分の親たちを「喰い尽くした」という比喩的表現は、当の地主たちに実際に子供の肉を喰わすのが相応しいという提案者の意見によって、単なる比喩以上の辛辣な当て擦りに変化しているのである。

スウィフトは、熟慮のうえでこのようなペルソナを創造しているというこ

とが、以上の四つの特徴を、スウィフトの風刺の観点から、更に詳しく吟味することで分かるだろう。そればかりでなく、彼の用いた他のペルソナ（例えば *Gulliver's Travels* 第四篇'A Voyage to the Houyhnhnms'におけるガリヴァ）と同様、その陰には風刺家スウィフトが厳に存在して、風刺の矢を放っているという事実を、いかに読者に意識させるように仕組まれているかということが分かるであろう。

まず、第一点の特質、即ち、論述の冷静さの持つ風刺上の効果は、当時流行した各種のパンフレット類の筆法を模倣したものであるという、パロディとしての意味を別とすれば、幼児を食用にするという特異な提案内容を、際立たせるために、故意に冷静な文体をスウィフトは選んだものであると考えられる。淡々とした語り口によって、その中に込められた風刺は鋭いものとなるのである。しかし、この特質は、作品の全体を通じて貫かれている訳ではない。*"although, perhaps, I could name a Country, which would be glad to eat up our whole Nation without it."* (117)という一節などはその最も顕著な例である。イングランドに対して、あからさまに風刺的なこの文章においては、Nigel Woodが述べているように、スウィフトは、彼の感情を直接語っているように見える。[22] ここばかりではない。本論の始めに引用したように、本来取り入れられるべきであった、スウィフトの行ってきた様々な提案を列挙した上に、「このような便法を言うのはよしてもらいたい」との言明をその前後に二度も繰り返している箇所などには、彼の不満や怒りが直接的な形で表されていると考えられるだろう。

第二点に関しては、統計学の装いは、当時のいわゆる政治算術 Political Arithmeticのパークレスと考えることが出来る。John BrownやWilliam Pettyの論述と、スウィフトの分析がいかに酷似しているかは、George Wittkowskyが指摘した通りである。[23] *A Modest Proposal* は、その題名も含めて、スウィフトの目には無益なものにしか映らなかったであろうような、当時のパンフレット類の単なるパロディではなく、「パロディを越えたレベルにまで達した」ものであると言えるだろう。[24]

次に第三点の、母親や子供を家畜並みに扱うことの背後には、アイルランドにおいては既に彼ら貧民が人間らしい生活を営める状況にないことが当然

のように見做されている現実に対するスウィフトの怒りが隠されていると考えられよう。K. Williams が指摘しているように、耕地が次々に牧草地に変えられていく環境下で、人々に残された道は自分の子供を食肉にして家畜どもと張り合う以外にないこと、また、人間は、動物扱いされれば、自ずとそのように振る舞うようになってしまうものであるということを、スウィフトは突いているのである。[25] この意見は、Ferguson のもっと辛辣な見解を、一般に受け入れられるものに和らげたものであるということが出来る。Ferguson は、この作品における風刺の攻撃対象が専らアイルランド人である、との立場から次のように述べている。"Swift is saying to the Irish, in effect, "You have acted like beasts; hence you no longer deserve the title of men.""[26] この見解は、傾聴すべき意見ではあるものの、動物並みの行動に人々が追い込まれていることの原因を彼ら自身にのみ求め、外的な要因を意図的に無視しているように思われるだけでなく、スウィフトあるいは提案者を、過度に嘲笑的な人物に見せている嫌いがあり、かなり極端なものであるといわざるをえない。

いずれにせよ、家畜として人間を扱うことを述べることそのものに、スウィフト独持の人間観が表されているようである。そしてこのことが、先に指摘した第四の特質、即ち、あからさまなアイロニーの使用に密接に関わりを持つものなのである。皮肉や反語を操っている人物は、スウィフトの仮構したペルソナであると同時に、否、それ以上に風刺家自身であるのだ。彼の風刺は、もはやその対象に、相手を選ばない。人類全体が痛罵と逆説の対象になりうるのである。ガリヴァは、ブロブディンナグ国王に'the most pernicious Race of little odious Vermin'[27]と同胞を呼ばれてしまい、いたく憤慨するのであるが、スウィフトにしてみれば、真実を突かれて狼狽するガリヴァや、彼に代表される人間たちこそが、揶揄嘲笑の対象なのである。ヤフー的な性情からついに抜け切ることの出来ない人類こそ、この上なく醜悪なもの、家畜や虫けらに比すべきものなのである。そして、その救いがたい人類のなかでは、程度や傾向の差はあっても、地主も貧民も、つまり、喰う方も喰われる方も、蔑むべきものである、と考える態度が *A Modest Proposal* の風刺の基調になっていることを否定できないのである。F. R. Leavis は、専らスウ

ィフトの風刺の否定的な側面に注目している。彼によれば、*A Modest Proposal* を始めとするスウィフトの作品は、"most remarkable expression of negative feeling and attitudes that literature can offer"であると言う。[28] 結局の所、この上なく辛辣なアイロニーと逆説によって成り立つこの作品を支えているのは、アイルランド人を含めた人類の教化の不可能性を、自らの提案が受け入れられぬまま終わった苦い経験から、痛感するに至ったスウィフトの、人類に対する怒りと軽蔑という、きわめて否定的な観念であったと言えるだろう。このことは、風刺の枠をほとんど越えんばかりの、彼の否定的で悲観的な人間観が、彼のペルソナの陰にはついに収まりきれず、作品そのものから色濃く滲みでていることに具体的に表れているのである。

結び

この作品を、積極的にアイルランド人民を教化し、貧民が人間としての誇りを持ち、地主が非人間的な収奪や奢侈を止めるように説得し、さらにはイギリス本国に対するアイルランドの植民地的な地位に改善をもたらそうという、人類の進歩、向上の可能性に期待しての企てであると見ることは、魅力的ではあるが、多少難しいのではないだろうか。もちろんこのような積極的な意義を全く認めることは出来ないという訳ではないし、スウィフトのアイルランド関係のその他の言論に関しては、様々な実際的な提案を具体的に行っていることからみても、彼の人類教化の意図は明白であろう。しかしながらこの作品に限って言えば、彼の人間観の否定的な側面を覆い隠してしまうような楽観的な読みは出来ないと言わざるをえないのである。

はじめに見たように、スウィフトは提案者の仮面を捨てて、それまでに真剣に訴えてきた提案内容を繰り返している。このことによって、彼が希望を捨て去ってはいないことを示しているとは言えるかも知れない。仮に Ferguson の言うように、[29] 1727年頃のスウィフトは、アイルランド人自身が状況を改善できると信じていたとしても、恐らくこの作品が書かれた1729年になると、アイルランド問題全般に対する絶望は覆いがたいものとなっていたことであろう。従って、それら本来の提案が実現されることはありそうもないという

現実の状況を、彼は正しく認識していた、ということも同様に確からしいのである。そして提案が顧みられないという恐れが現実のものとなったのを、彼はかつて実際に経験しているのである。

> *Wisdom crieth in the Streets; because I have called and ye refused; I have stretched out my Hand, and no Man regarded. But ye have set at nought all my Counsel, and would none of my Reproof. I also will laugh at your Calamity, and mock when your Fear cometh.*[30]

A Modest Proposal 執筆の時点において、人類教化の可能性を対する希望と絶望とがスウィフトの心中でどのような割合で存在していたかを推測すると、恐らく前者は後者にほとんど呑み込まれてしまいつつあったに違いないであろう。そしてその過程のなかに彼のアイルランド関係の作品や様々な提案を置くことができる。それらの最後に位置する *A Modest Proposal* で、彼が自らの行ってきた真面目な提案を'vain, idle, visionary Thoughts'と表現したこの言葉が、純然たる反語ではなく、人類にとっての真実を含むものであったというところに風刺家の内面の苦しみの深さを窺い知ることができるのである。

註

1 Jonathan Swift, *Gulliver's Travels,* Vol. XI of *The Prose Writings of Jonathan Swift,* ed. Herbert Davis and others (Oxford: Basil Blackwell, 1939-68), p.8. 以下のスウィフトの散文作品からの引用はこの全集による。

2 Arthur E. Case, *Four Essays on Gulliver's Travels* (Gloucester: Peter Smith, 1958), pp.19-20.

3 Swift, *A Modest Proposal,* in *Irish Tracts 1728-1733,* Vol. XII of *The Prose Writings,* p.117. 以下、この作品からの引用は、本文中に頁数を記す。

4 夏目漱石『文学評論（下）』（東京：岩波書店）p.121.

5 Swift, *Irish Tracts 1720-1723 and Sermons,* Vol. IX of *The Prose Writings,* p.128.

6 Ⅸ, 199-209 ; Ⅸ, 13-22 ; Ⅻ, 1-12. 不在地主の問題を扱った作品では、他に、*Maxims Controlled in Ireland*『アイルランドにおけるいくつかの格言』(Ⅻ, 129-137) 等、また、国産品使用に関しては、他に、*Letter to the Archbishop of Dublin, concerning the Weavers*『機織り職人に関するダブリン大主教への手紙』(Ⅻ, 63-71)等、多数の論述がある。

7 Ⅻ, 65.

8 Irvin Ehrenpreis, "Dr. S * * * t and the Hibernian Patriot," in *Jonathan Swift 1667-1967: A Dublin Tercentenary Tribute,* ed. Roger McHugh and Philip Edwards (Dublin: The Dolmen Press, 1967), p.37.

9 *The Correspondence of Jonathan Swift,* ed. Harold Williams (Oxford: Clarendon Press, 1963-65), Ⅲ, 286. スウィフトは、食物や友人によく恵まれていることを述べた手紙も残している。 *Corr.* Ⅲ, 251.

10 Ⅺ, 112-13 (Bk. Ⅱ, ch. iv), 174-75 (Bk. Ⅲ, ch. iv).

11 John Holloway, *The Charted Mirror* (London: Routridge & Kegan Paul, 1960), p. 81.

12 "Holyhead. September 25, 1727" in *The Complete Poems,* ed. Pat Rogers (Harmondsworth: Penguin Books, 1983), pp.329-30.

13 "Ireland," *Poems,* p.330.

14 Oliver W. Ferguson, *Jonathan Swift and Ireland* (Urbana: Univ. of Illinois Press, 1962), p.144.

15 Herbert Davis, "Swift's Character" in *A Dublin Tercentenary Tribute,* p.22.

16 Ⅸ, 206.

17 Ⅸ, 207.

18 Donaldo T. Torchiana, "Jonathan Swift, the Irish, and the Yahoos: The Case Reconsidered," *Philological Quarterly,* 54 (1975), 208.

19 John M. Bullitt, *Jonathan Swift and the Anatomy of Satire* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1961), p.61.

20 Kathleen Williams, *Jonathan Swift and the Age of Compromise* (Lawrence: Univ. of Kansas Press, 1965), p.136.

21 Everett Zimmerman, *Swift's Narrative Satire* (Ithaca: Cornell Univ. Press, 1983), p.69.

22 Nigel Wood, *Swift* (Brighton: The Harvester Press, 1986), pp.120-21.

23 George Wittkowsky, "Swift's *Modest Proposal:* The Biography of an Early Georgean Panphlet," *Journal of the History of Ideas,* 4 (1943), 75-104.

24 Maurice Johnson, *The Sin of Wit: Jonathan Swift as a Poet* (New York: Syracuse Univ. Press, 1950), p.128.

25 Kathleen Williams, "Jonathan Swift," in *Dryden to Johnson,* Vol. Ⅳ of *Sphere History of Literature* (London: Sphere Books, 1971), p.64.

26 Ferguson, p.173.

27 Ⅺ, 132 (Bk. Ⅱ, ch. vi).

28 F. R. Leavis, "The Irony of Swift," in *The Common Pursuit* (London: Chatto & Windus, 1952), p.86.

29 Ferguson, p.149.

30 *An Answer to a Paper Called a Memorial,* Ⅻ, 23.